2022 年 3 月 8 日放送

小児科医ができるアドボカシーとは

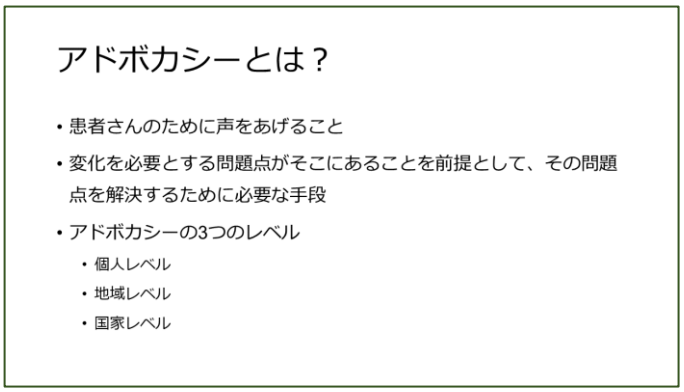
国立成育医療研究センター　緩和ケア科
診療部長　余谷　暢之

アドボカシー（advocacy）という言葉には様々なイメージがおありかと思いますが、日本語でどう理解したらいいか少し分かりにくいということがあるかもしれません。

今回は小児科医ができるアドボカシーについて、アメリカ小児科学会が出している『アドボカシーガイド』の内容を紹介しながら、お話を進めていきたいと思います。

アドボカシーとは

ここで書かれているアドボカシーとは、「患者さんのために声をあげることである」とされています。変化を必要とする問題がそこにあるということを前提として、その問題点を解決するために必要な手段として、アドボカシー活動が位置付けられています。そして、アドボカシーには 3 つのレベルがあるとされています。「個人レベルのアドボカシー：インディビジュアル・アドボカシー（individual advocacy）」「地域レベルのアドボカシー：コミュニティー・アドボカシー（community advocacy）」「国家レベルのアドボカシー：ステイト・アンド ・フェデラル・アドボカシー（state and federal advocacy）」この 3 つです。1 つずつ説明していきたいと思います。



まず個人レベルのアドボカシーですけれども、これは個々の患者さんの健康や福祉を向上させるために、小児科の先生方が普段行われている活動のことを指します。例えば、個々の患者さんに代わって、保険会社や学校、他の医療機関または社会サービス機関に連絡をするようなことが含まれてきます。そして、この個人レベ

ルのアドボカシーが、社会や国家レベルのアドボカシーに繋がる基盤になるとされています。

次に地域レベルのアドボカシーですけれども、これは小児科医がコミュニティーと協力して、子どもの病気の根本的な原因を探り、そして予防活動を通じて、その原因に対処しようとするといった取り組みになってきます。その活動は、病気の原因となっている行動を変えようとする教育キャンペーンや、啓蒙活動などが含まれてきます。例えば、安全な遊び場をどのように作ればいいかとか、貧困対策をどうするか、児童虐待の問題、また健康的な食品へのアクセスなどが含まれてきます。子どもの健康に影響を与える環境的・社会的要因を取り扱って、そしてコミュニティーのパートナーと協力をして取り組む活動、これが地域レベルのアドボカシー活動になります。

次に国家レベルのアドボカシーですけれども、これは子ども達の健康に影響を与える公共政策や法律規則を変えることであります。例えば、子どもが受動喫煙をしないように公共の場での喫煙を禁止する法律を成立させるとか、小児用の医薬品の試験を義務付けるとか、このように法律や規則を変えることで、子どもの健康に繋げる活動にする、これが国家レベルのアドボカシー活動であります。

では、小児科医が地域や国家レベルのアドボカシー活動を行う意味は、どういうものでしょうか。より多くの小児科医がアドボカシー活動に積極的に参加することで、意思決定者や地域のリーダーに、小児科医が子どもの健康問題に精通していることを認識してもらうようになります。そして、それが地域社会の新たな規範や、患者さんの健康と安全を守るための公共政策につながる可能性があり、小

個人レベルのアドボカシー

- 個々の患者さんの健康や福祉を向上させるために、小児科医が行う活動
- 例えば
  - 個々の患者さんに代わって、保険会社、学校、他の医療機関、または社会サービス機関に連絡すること
- これが社会、国家レベルのアドボカシーにつながる基盤になる

地域レベルのアドボカシー

- 小児科医がコミュニティと協力して、子どもの病気の根本的な原因を探り、予防活動を通じてその原因に対処しようという取り組み
- 子どもの健康に影響を与える環境的・社会的要因を取り扱い、コミュニティのパートナーと協力して取り組む

国家レベルのアドボカシー

- 子どもたちの健康に影響を与える公共政策、法律、規則を変えること

【例】

- 子どもが受動喫煙しないように公共の場での喫煙を禁止する法律を成立
- 小児用医薬品の試験を義務付ける

小児科医が地域・国家レベルのアドボカシーを行う意味

より多くの小児科医がアドボカシーに積極的に参加する

↓

意思決定者や地域のリーダーに小児科医が子どもの健康問題に精通していることを認識するようになる

↓

地域社会の新たな規範や、患者さんの健康と安全を守るための公共政策につながる可能性がある

児科医の社会的な役割を大きくしていくことにも繋がっていく活動になると言われています。

アドボカシーの始まり

このようにアドボカシー活動を行っていくわけですが、アドボカシーの始まりは、臨床の中の物語から始まるとされています。これは『アドボカシーガイド』に書かれていますが、例えば、ある小児科の先生が初めて州政府への提言を行ったのは、自転車から落ちて頭蓋骨を骨折して、脳外科手術を受けることになった患者さんがいたからであるとされています。その患者さんのお母さんが、「幼い子どもにヘルメットを着用させる法律がないのはなぜか？」という質問をしたことをきっかけに、自分達が州議会に法案を提出するためのキャンペーンを開始しました。結果的に法案の制定には至りませんでしたが、同じ州のある町で子どもの自転車用ヘルメットの着用を義務付ける市条例を、州内で初めて制定することに繋がりました。このようなことですね。

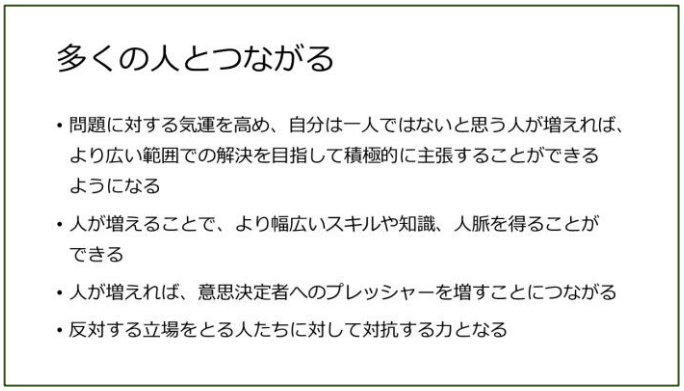
つまり、臨床の現場から出てきた疑問に対して、活動を通じて社会の行動を変える、社会の規範を変えることは、アドボカシー活動であるということです。このように考えていただくと、とても理解が進むのではないかと思います。

アドボカシー活動に大切なこと

そして、アドボカシー活動始める前には、この 3 点について確認をしてみると良いと書かれています。まず 1 つ目は「現実的なものかどうか」ということですね。また「達成可能な目標設定ができているか」どうかを評価して、「取り組むべき課題を 2 つか 3 つにまず絞ってみる」ことが大事だと言われています。そして一度に全てを達成するのではなくて、必ず短期的な目標やベンチマークを作り、途中で経過を把握しながら進めていくとされています。また、広く考えることが重要で、目標を達成するために、どのように進めていくかを少し俯瞰した形で広く考えてみることが重要です。

そしてもう 1 つ大事なことは、「多くの人と繋がっていくこと」であると言われています。問題に対する機運を高めて、まず自分はひとりではないと思う人が増えてくれば、より広い範囲での解決を目指して、積極的に主張することにつながっていきます。

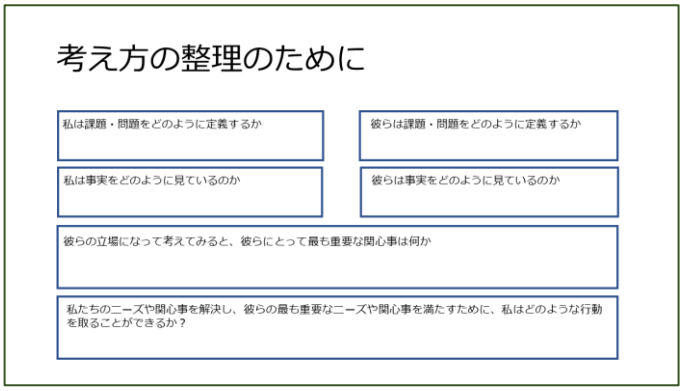
また、人が増えることで、より幅広いスキルや知識、人脈を得ることにつながり、また人が増えれば、意思決定する人に対してプレッシャーを増すことにもつながってきます。また、反対する立場の方もいらっしゃると思いますので、そういった方々に対して対抗する力になることにも繋がってきます。そういう意味で、多くの人と繋がることはとても大切になってきます。



アドボカシー活動の注意点

ただ、多くの人を巻き込む際には、いくつかの注意点があると言われています。まず、最初に「アドボカシー」にそもそも馴染みがある人は少ないので、参加をためらう人がいることをまず認識しておく必要があります。そういった意味でも、まず知り合いから始めていくというのは現実的な戦略です。また、自分の問題を巻き込もうと思う人の利益に結びつける工夫をする事はとても大事です。つまり、相手がこの活動することで、どういった利益があるかを考えながら巻き込んでいくことが重要であるということになります。

また具体的に、なぜその問題が重要であるか、そして、なぜその方々の助けが必要なのかを丁寧に伝えながら、相手に具体的に要求を伝えていくことも重要だと言われています。また、場合によって個人ではなく組織を巻き込むことは、より大きな力につながってきます。その問題が目に見える形で、幅広い支持を得ていることを示すことにもつながりますし、また意思決定をする人がより広範な支持に答える可能性が高くなってきます。



このように組織を巻き込むことで、より多くのリソース、例えば人材やスキル、コネクションといったものが広がってきます。そういった意味で、組織を巻き込む事はとても大事だということが言われています。そして、そういう活動を繋げていきながら、最終的にはこの意思決定者とどう協働するかが大切になってきます。つまり解決するためには、それに影響を与えることができる意思決定者を巻き込むこと、これが重要になってくるわけです。

効果的なアドボカシー活動とは

この意思決定者の行動を促すために何ができるかと言いますと、効果的なアドボカシー活動に繋げるためには、そのまず意思決定者は誰なのか、そこを特定することから始めます。そして話し合いを行いながら、「自分ごと」にしていただくということが重要です。そのためには、意思決定者のモチベーションを理解することが重要だと言われています。例えば、その相手方が議員さんであれば、議員さんはやはり投票とか選挙に通ることが大事ですので、そういったことも踏まえながらアプローチをしていくことが重要になってくる、こういったことに繋がってくるわけですね。

そのためには、どのように考え方を整理するか、ですけれども、まず自分がその課題、問題をどう定義するかということと合わせて、意思決定できる人がその課題や問題をどのように定義するかということも合わせて考える。また自分がその事実をどのように見ているかということだけではなく、相手がどのように事実を見ているのかを考える。そして相手方の立場に立ってみたときに、その課題の中で相手にとって最も重要な関心事が何なのか、そして自分たちのニーズや関心事を解決し、そして相手方の最も重要なニーズや関心ごとを満たすためには、どのような行動

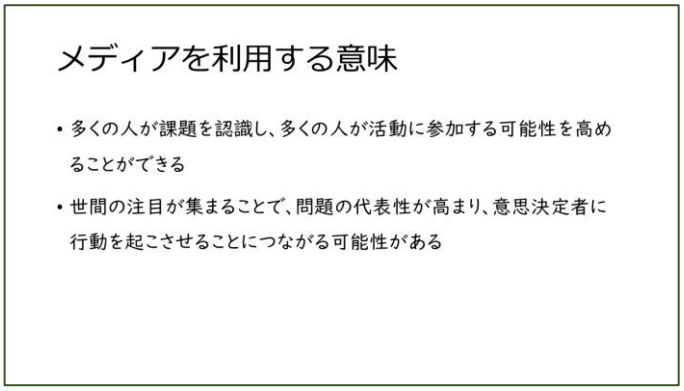
をとることが大事かということを考えていく、そういったプロセスをとりながら、考え方を整理していくと良いとされています。

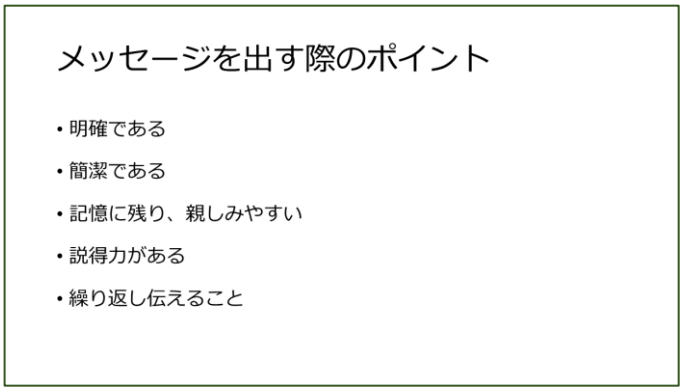
このように効果的なアドボカシー活動に繋げるためには、まず意思決定者に自分の問題を支持してもらうことはとても大事です。そして、自分が気にかけている問題について、自分がどう捉えるかを意思決定者に明確に伝えることが重要になってくるというわけです。そのためには、意思決定者と個人的かつ継続的に連絡を取ることは重要で、そうすることでその方々の関心を引くだけではなく、最終的に意思決定できる人との関係性を構築できると、将来的にもその方々と一緒に子どもたちの健康と福祉を支援していく活動に繋がっていくことになりますので、やはりこういった方々とどういうコネクションをとっていくかが大事だということが書かれています。

メディアの活用

そして、最近一つ大事なことは、メディアを用いることです。メディアや SNS などのコミュニケーションツールを用いることで、課題に対する認識を高めて、最終的には変化に繋げていくことにも繋がります。このメディアを用いたアドボカシーは、いくつかの方法がありますが、例えばお金を払って利用するメディアとして、インターネットや新聞・テレビなどの広告スペースを購入すること、これも１つの方法であります。また別の方法としては、新聞や雑誌編集者へ手紙を書くとか、論説をかくとか、またテレビやラジオのニュースのインタビューを受けるとか、そういう形で相手方が自分の問題について肯定的な論説を掲載してくれるように働きかけることがあり、これはより効果的なアドボカシー活動につながるとされています。また、コミュニケーションツールを用いるパンフレットの作成や SNS の投稿、会場でのブース設置といったことも有効に使っていく必要があります。

このようにメディアを利用することで、多くの人が課題を認識し、そして多くの人が活動に参加する可能性を高めることに繋がります。また、世間の注目が集まることで､問題の内容性が高まって、意思決定者に行動を起こさせることにも繋がりやすくなってくるわけです。そういった際に、やはりメッセージを効果的にだすことが必要になってきます。そのポイントとしては、メッセージが明確であること、また簡潔であること、そして記憶に残りやすく親しみやすいものであること、また説得力があること、これを繰り返し繰り返し伝えること、これが重要であるとされています。

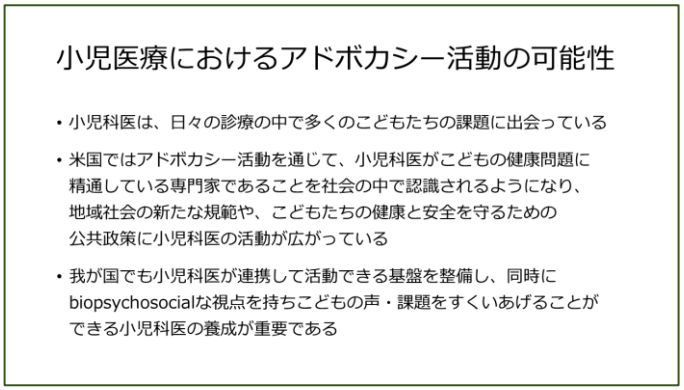




日本の基盤整備に向けて

そして、もう一つ大事なことは、小児科医は医療現場でいろんな課題を見ていますので、そのメッセージと個人的な物語とをうまく繋げていくことが大事だと言われています。そうすることで、問題の重要性を高めることにも繋がりますし、また問題がより具体的で人間味を持ったリアルな感じになってきます。これが意思決定者や、支援をつなげていく意思決定者の行動を変えたり、支援に繋げたりしていく上ではとても重要であるとされています。

繰り返しになりますが、小児科の先生方は、日々の診療の中で多くの子どもたちの課題に出会っていると思います。それぞれが気づいた課題を繋げていくことで、より大きな変化につながる可能性があり、これがアドボカシー活動であるとされています。



ただ米国との違いは、日本ではそういった基盤がまだまだ脆弱であるということがあると思います。米国ではアドボカシー活動を通じて、小児科医が子どもの健康問題に精通している専門家であることを、社会の中で認識されるようになって、地域社会の新たな規範作りや、子ども達の健康と安全を守るための公共政策に、小児科医の活動が広がっているということがあります。そういった意味で、我が国でも小児科医がすくい上げた子どもの声や課題が、子ども真ん中の地域づくりや政策提言に繋げられるように、小児科医が連携して活動できる基盤を整備することが大事だと思います。

また同時に、バイオサイコソーシャル（Biopsychosocial）な視点を持った子どもの声、課題を作り上げることができる小児科医の養成が重要であると考えています。

「小児科診療 UP-to-DATE」

http://medical.radionikkei.jp/uptodate/